

## 病んで、知って、豊かに生きる



現在、日本人女性の20人に1人がかかると言われる乳がん。

今月は、65歳のときに乳がんを宣告された評論家の俵菰子（たわらもえこ）さんの言葉をご紹介します。右の乳房を切除する手術を受けた6年後、俵さんは、がんを患った女性同士が手をつなぐことを目的にした、患者の会を立ち上げます。

家族にも言えない悩みを共有する場ができ、患者の会が薬と同じ役割を果たしてくれたと、俵さんは言います。しかし、患者会の会報を発行するにあたって、亡くなった仲間のことをどう伝えるかに、深く悩みました。

### 『NHKラジオ深夜便』7月号より

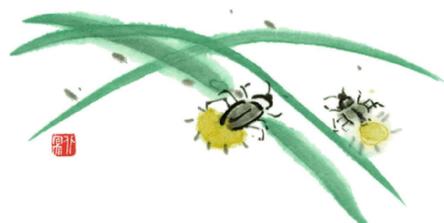


はじめのうちは、仲間の死を知らせると会員が元気をなくすと考えて「できれば隠したい」と思っていました。でも、そうもいかない。死から目をそむけてはいけないと思ったのです。

仲間の死がなぜ悲しいのか。考えてみると、その人の笑顔、お互いに胸をなで合って「大丈夫よ」と励まし合った言葉など、いい思い出がたくさんあるから悲しいのだとわかります。その悲しみの底には、「彼女と出会えてよかった」という感情があるはずなんです。それからは『あなたに出会えてよかった』というタイトルで、会報の真ん中に訃報の欄を堂々と入れることにしました。亡くなった方の思い出をたっぷり書いて追悼し、ご家族を慰める。このページを、会報のメインにしてしまったのです。

**がんは、たくさんの仲間の命を奪っていきました。その仲間たちの姿を目の当たりにして思うことは、「自分は生かされている」ということです。**

私は自分が病気をして初めて、人の弱さ、人とのつながりの温かさを知ったのだと思います。病んだことによって学んだことが、どれだけ多いか…。最近、そのことをずっと考えています。



俵さんは「病んで、知って、豊かに生きる」と色紙に書き、いつも自分の目に入る場所に飾るようになりました。

**死と向き合うことで見えてくるもの…。**蓮如上人（本願寺八世ご門主 1415～1499）の手による『白骨のご文章』には、「朝には紅顔あって、夕べには白骨となれる身なり」と、人間の命のはかなさがとうとうと述べられています。その裏には、「命のはかなさを知ってこそ、生かされている自分に気づき、今この時を豊かに生きることができる」という、蓮如上人のメッセージが隠されているのです。